

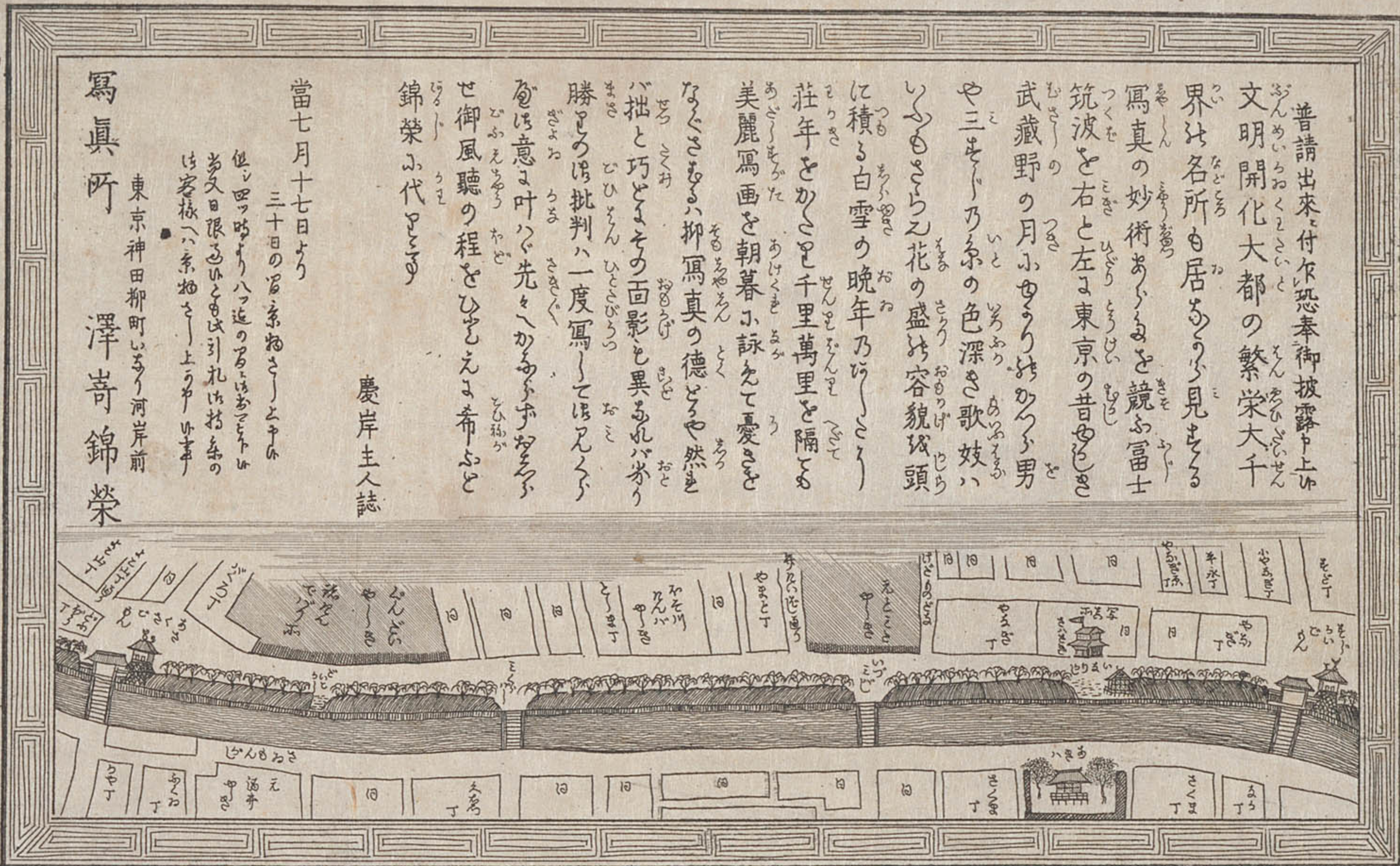
普請出来付々恐奉御披露止し
 文明開化大都の繁栄大千
 界は名所も居あつて見まはる
 寫眞の妙術あつても競ふ富士
 筑波を右と左は東京の昔も
 武蔵野の月小あつて男
 や三まゝのいろの色深き歌妓
 いふもとら花の盛り容貌城頭
 に積る白雪の晩年乃ほり
 壯年をかごと千里萬里を隔てる
 美麗寫眞を朝暮小詠をて憂き
 なんごも抑寫眞の徳もや然
 拙と巧とその面影も異ぬれば
 勝つての批判ハ一度寫しては
 愈は意叶叶先々かゝる物
 せ御風聴の程をいふ希ふ
 錦榮ふ代

慶岸主人誌

當七月十七日より

三十日の留糸物さりとす
 但し四ツ時より八ツ時の間は
 歩又日限をいよば引れは
 は岩板ハ糸物さりとす

寫眞所 澤奇錦榮
 東京神田柳町いちり河岸前



出客の儀ハ前日ハ沙汰をなすハ何れハ由出張可仕
 是れ宛心御しハ各料ハ借留仕ハ客は是れ宛心御し
 別と要とせ普く弘通ハ共ハ益と清にて今日國士の恩を謝せん
 則ち書ハ受おハは凡ハ已上
 錦榮再拜

寫眞所開業広告 文庫10-8034-47

早稲田大学図書館蔵 / Waseda University Library

